

# 聞き書き史談ほか萬控え（八）

茶屋が鼻界限の今昔

林 寅 喜

（会員・佐伯市中の島）

昭和五年（一九三〇）茶屋が鼻橋の架橋により、木立はようやく陸の孤島から開放された。それまでの茶屋が鼻には渡し舟はあったが、木立の産物搬出や村人達の往来は、主として土井（註一）か角道（註二）から『おろし』と呼んでいた舟を利用していたので、茶屋が鼻の渡しは徒歩の人か、地理に疎い他村の人に限られていた。『おろし』は大正の初め頃までは手漕ぎに帆を備えた小舟であったが、中頃から焼玉エンジンの機械船に変わり、最盛期には角道から二隻、土井から三隻の計五隻で、船頭町の池船橋下（今の交差点附近）にあった『上り場』との間を、日に三度も四度も往復していた。しかし、これも茶屋が鼻橋の架橋によって乗り合いバスが走るようになってから、自転車や一般大衆の足として普及し始めると、



津志河内橋から見た木立川（矢印は元越山）

その煽りを受けて一隻また一隻と姿を消し、戦後は山林の乱伐に基づく土石流によって河床が隆起し、干潮時は航行にも支障を来たすような状況となり、二十七、八年頃を境として、残った船もすべて廃業した。また、この時代木立の主産物であった甘藷や木炭・薪・木材なども、土井と角道から専用の荷船によって搬出していたが、こちらも戦後は目覚ましい運輸機構の進歩に対抗できなくなり、二十四、五年頃までに廃業した。

一方、津志河内橋の小島側を百イ程遡った所に

水門があり、傍らに小さな家があつて管理のため老夫婦が住み、小島・津志河内からの渡守も兼ねていた。しかし、これも昭和三十三年十二月、最初の架橋(木造橋)によつてお役御免となつた。

◇ ◇ ◇

茶屋が鼻から木立側へ少し入つた所に、僅かばかりの窪地があつて前面は浜辺となつていた。そこへ元禄の昔六代藩主高慶公が、休息のため御茶屋を建てたというところから、茶屋が鼻と呼ばれるようになったと言ひ、山裾には御典医で二代目奥井春耕の妹、?(一五五号参照)志



鼻茶屋から見た(蛇崎側)対岸  
(矢印が地蔵(昔は人家などなかった))

幾子という側室の願望によつて、享保四年(一七一九)造営したとされる諏訪神社があつたが、今は須留木の地下に移築されている。なお、その跡地には井戸があつたと聞いたが、これも今は三八八号の

道路敷地となり、何の跡形も残っていない。

橋がなかった昭和初期までの茶屋が鼻は、風光明媚で木立一番の名勝地であつたという。以下は昭和四年発行の郷土読本の中から、その一部を紹介しよう。

木立名勝はお茶屋が鼻よ

松が見えますほのぼのと

春がすみの中をすべつて行く鱸との音の長閑のどかさよ

夏の涼みはお茶屋が鼻よ

鯿ぼらこがとびます松の枝

サツと拡がる名手の投げ網 正に涼味萬斛ばんごく

操の色のこいみどり

操と水竿をかけたものか?水竿にはよく青竹が用いられていた。

水にうつして朝夕に

若き血潮の高鳴りを

永久とくに調べん茶屋が鼻

今は見る事などないが、朝霧に浮かぶ小舟からの投網漁は、まさに一幅の絵にふさわしい風景でもあつた。

昔は茶屋が鼻に限らず附近一帯で鯿が多く獲れ、カラスミ(塩鯿)といつて熨斗鮑と共に、祝膳では欠かせぬ逸品として用いられたへ藩政資料の生産もあつたという。

◇ ◇ ◇



茶屋が鼻は木立川と堅田川の合流点附近にあり、堅田川の本流と支流が合流した水衝部にあたる。(地図参照) そのため前面を深くえぐられて(今は河川改修によって状況が違ふ)潮時によっては渦を巻き岩肌をかむ。この景観を目の当たりにした独歩は、その日記『欺かざるの記』の中に

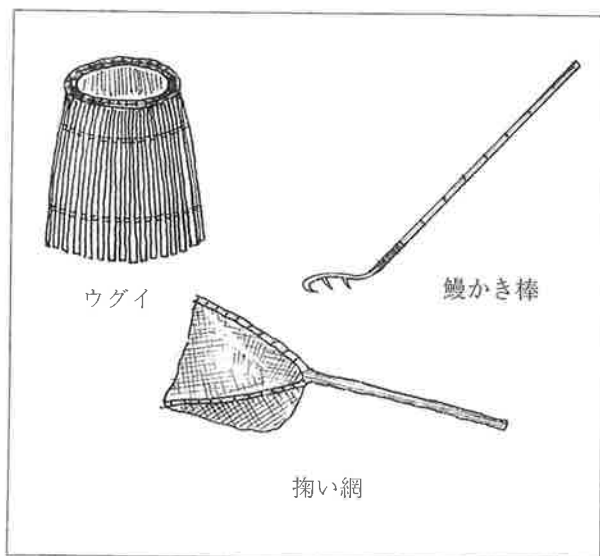
「青びかる淵、きびわるげのうづ、皆吾が目にもずらしからぬはなし」と書き残している。

◇ ◇ ◇

木立には昔から「たて網漁」という催しがあった。それは毎夏八月の御祓潮おんはらいしほの当日、満潮時を見計らって津志河内橋の上流へ川幅一杯に網を張り、引き潮を待つて一般に開放し魚の捕み取りをさせていた。当時農村での漁具といえはせいぜい「ウグイ」か「掬い網」、外には「ザル」(バイスケ)か「鰻掻き棒」程度の簡易なものしかなかった。ところが、大勢おしかけて掻き廻すため、濁りに酔って逃げ場を失い、鰻はらや鰪このしほ・鱸ますに鰻までが手捕みでも結構獲れた。このような行事も今はなく、冬に来る鴨の群れに往時をしのぶ。

茶屋が鼻の渡しを蛇崎側に取り、土居(堤防)伝いに

行くとき小さな曲がりがあった。附近を「トイの瀬」と言  
い沖に向かつて大きな洲があり、護岸沿いには深みがあ  
った。曲がり角に小さな祠があって、横に松の古木が一  
本あったが、落雷によって何時しか枯れてしまった。護  
岸には榎や樺などの雑木が自生していて根を張り、外は



一面茅と渚木に覆われ、人の通れる所は幅が一・五、六  
トイ位しかなかった。

茶屋が鼻に地蔵が祀られたのは、何時の頃か定かでないが、舟の航行安全を願ってのものらしく、沖に向けて  
祠られており、横に見事な松が一本あったがこれも今は  
ない。

昭和十二、三年頃この上空で、海軍の戦闘機が訓練  
中接触事故を起こして墜落したことがある。当時この  
上空には乱気流があつて、それが事故の原因であるとい  
つた噂を聞いた。



昭和三十五年、茶屋が鼻橋は永久構造の**鋸桁橋**として  
架け変えられたが、工事中目にした職人芸は今もって忘  
れることができない。それは橋桁を緊結するために行な  
う**鉦打ち**であつた。作業は橋桁の上に置いた大型の「カ  
ンテキ」（**鋸金用の半田鍍**を加熱する携帯用の**炉**）から、  
真赤に焼いた**鉦**（重さ一〇〇グラム前後）を取り出し、長柄の  
火挟みによって相方に向かい放るのである。その距離凡  
そ一四、五メートル、鉦は緩やかなカーブを描いて飛んで行く。  
それは夜空に光る流れ星か、打ち上げ花火の火柱の如く、

夕闇迫る黄昏時など只呆然と立ちすくみ、唾を呑んで見守った。一方、円錐形の鉄製器具を持ってこれを受ける相方の、手捌きたるや寸分の狂いもなく、二人の呼吸がピタリと合うのか、十に一つの失敗もなかった。こうした技倆に感嘆しつつ、通るたびに足を留め、飽くこともなく見入ったものである。

今は溶接技術の進歩と高張力ナットの出現によって、このような光景を目にすることなどない。消えて行く職人芸まだ外にもあると思うが……

註一 土井は近世になって木立川の川口に出来た沖積地と考えられる。したがって、藩政時代にはそれ程開けた土地ではなかったが、明治に入り町との交通が頻繁になるに連れて、人が住むようになったと考える。独歩が元越山に登った明治二十六年十一月、舟で着いた所を「木立と謂う村の川岸に着す」と書いているから、土井であったことに間違いない。(角道は昔から狭いながらも港として形成されていた)もしこの時角道に上がっていたとしたら、多分浦代峠などへは行かず、宮河内道か

ら登っていたと思う。なお、翌二十七年四月の二回目は、七人揃って角道に上がっている。(富永徳磨日記)

#### 註二

角道は木立の門戸として開けた所で、藩政時代には木場が置かれて産物の積み出しから、藩主の御郡回りや家臣達の往来には、必ず舟でここが上がりに、峠を越えて米水津浦や畑野浦へ回っていた。また、角道は地勢上湧き水が豊富にあり、今でも五、六ヶ所からこんこんと湧き出て、水質もよく枯渇することなどない。昭和の初め頃までは「正の井」という造り酒屋もあった。

#### 追記

茶屋が鼻の地名は土地台帳に登載された正式の地名ではない。正式地名は大字木立字スルギである。したがって、茶屋が鼻とは単なる地名に過ぎない。また、茶屋が鼻と書くのが正しいのか、茶屋ヶ鼻が正しいのかこれもよく分からないが、本文では昭和二年版(発行同四年)木立小学校刊行の「郷土読本」にしたがった。なお、橋梁の親柱には茶屋ヶ鼻と刻んである。